慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中世ヨーロッパの古代ローマに対する関心への一視点： マギステル・グレゴリウスの『首都ローマの驚異の物語り』を中心にして
Sub Title	Intorno a "Narracio de Mirabilibus urbis Romae" da Magister Gregorius
Author	末吉, 雄二(Sueyoshi, Yuji)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲學 No.91 (1990. 12) ,p.313- 328
JaLC DOI	
Abstract	Lo scopo di questo rapporto e nell'offrire un'indizio sul problema, come si vide l'arte antica nel Medioevo. Paragonanndo con la piu famosa "Merabilia Urbis Romae" che sarebbe una guida di Roma semiufficiale e un po' politica da parte pontificale nel mezzo o seconda parte di 12mo secolo, io mostro che "Narracio" del Magister Gregorius e un'opera della critica d'arte al meno nelle sue parti migliori. Nonostante che il Gregorius gli includesse la discrizione sui monumenti miracolosi citati da "De septem miraculis Mundi", che non ha potuto veder mai, la sua discrizione sulle statue che lui ha sicuramente visto e talmente precisa e vivace che e possibile solo quando si parla sulle sue esperienze dirette. Secondo il suo prologo, Gregorius scrisse il "Narracio" alla richiesta dei suoi colleghi, questi sono considerati i cleeri nel vescovado di Norwich in Inghilterra. Percio, qusto "Narracio" puo essere la prova del fatto che nella seconda meta del 13mo secolo c'era gia una clima culutrale in cui si vide i monumenti antichi con gli occhi estetici e critici.
Notes	文学部創設百周年記念論文集I Treatise
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0313

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中世ヨーロッパの古代ローマに対する関心への一視点

——マギステル・グレゴリウスの『首都ローマの驚異の物語り』を中心にして——

末　吉　雄　二*

Intorno a "Narracio de Mirabilibus urbis Romae" da Magister Gregorius

Yuji Sueyoshi

Lo scopo di questo rapporto é nell'offrire un'indizio sul problema, come si vide l'arte antica nel Medioevo.

Paragonanndo con la più famosa "Merabilia Urbis Romae" che sarebbe una guida di Roma semiufficiale e un po' politica da parte pontificale nel mezzo o seconda parte di 12mo secolo, io mostro che "Narracio" del Magister Gregorius é un'opera della critica d'arte al meno nelle sue parti migliori.

Nonostante che il Gregorius gli includesse la discrizione sui monumenti miracolosi citati da "De septem miraculis Mundi", che non ha potuto veder mai, la sua discrizione sulle statue che lui ha sicuramente visto é talmente precisa e vivace che é possibile solo quando si parla sulle sue esperienze dirette.

Secondo il suo prologo, Gregorius scrisse il "Narracio" alla richiesta dei suoi colleghi, questi sono considerati i cleri nel vescovado di Norwich in Inghilterra. Perciò, qusto "Narracio" può essere la prova del fatto che nella seconda metà del 13mo secolo c'era già una clima culutrale in cui si vide i monumenti antichi con gli occhi estetici e critici.

* 慶應義塾大学文学部教授（美学美術史学）

『首都ローマの驚異 Mirabilia Urbis Romae』というタイトルで知られる，おそらく十二世紀の半ばもしくは後半期に匿名の著者によって書かれたローマの案内記が，中世人が首都ローマに残る古代ローマのモニュメントをどのような目で見ていたかを知るうえできわめて貴重な文献であることはよく知られているが[1]，ここで取り上げるのはもう一つの，十三世紀末の写本によって伝えられる，マギステル・グレゴリウス Magister Gregorius が著した『首都ローマの驚異の物語り Narracio de mirabilibus urbis Romae』の方である．もっとも，こちらの方も決してよく知られていないわけではないらしく，幾つかの美術論文で言及されていたし，特に私が参照した英語版が一九八七年に出てからは，周知の文献の一つとなったのだろうが，まだ日本語訳が出たわけではないので，ここでその内容の概略を紹介することも全くの無駄でもないだろう．

その英語版は，

"Master Gregorius, The Marvels of Rome—Narracio de mirabilibus urbis Romae—", Translated by John Osborne, Pontifical Institute of Medeaval Studies, Tronto, 1987.

Medeaval Sources in Translation 双書の第三十一巻である．

翻訳者のジョン・オズボーンの簡潔なイントロダクションによると，マギステル・グレゴリウスの手になる『首都ローマの驚異の物語り』は，十四世紀前半に英国のチェスター Chester のセイント・ヴァーバラ St. Werburgh 大修道院のベネディクト派修道士ラナルフ・ヒグデン Ranulph Higden の著した『ポリクロニコン Polychronicon』に部分的に引用されていることによってのみ知られてきたが[2]，一九一七年に，M. R. ジェイムスがケンブリッジのセイント・キャサリンズ・カレッジの図書館でより完全な写本を発見し，同年，雑誌『ヒストリカル・レヴュー』に発表した．この写本が現存する唯一のテキストで，現在もオリジナルの製本と木製のカヴァーのまま，同カレッジ図書館にある (nanuscript E iv 96)

ということである．研究者の見解は，この写本の筆記者は十三世紀の英国人であり，著者その人の直筆ではないことで一致している．その後，一九一九年のゴードン・ラシュフォースによる『ジャーナル・オブ・ローマン・スタディズ』での再発表と，R. ヴェレンティーニと G. ツッケッティによる『ローマ地誌 Codice topografico dell a Citta di Roma』（ローマ，一九四六年）に収録された．この英訳版は底本として一九七〇年に出版された，R. B. C. ユイゲンスのラテン語版（ライデン）を基にしている．

著者であるマギステル・グレゴリウスはこの『物語り』の著者であるということ以外には知られていないが，写本の存在および過去における引用が英国に限られていることなどから，英国人もしくは英国に長く滞在した人物であるという推測が許されるだろう．著述の年代も決め手となる根拠には乏しいが，上限は『物語り』の第一章に引用されたラヴァルダンのヒルデベルト Hildebert of Lavardin の詩から，詩人の生没年一〇五六頃～一一三三年が目安となり，下限はすでに言及した『ポリクロニコン』の著された十四世紀前半ということになる．しかし J. C. ラッセルの『十三世紀英国の文筆家事典』（ロンドン，一九三六年）によると，一二三八年五月八日に，国王ヘンリー三世がノリッジ Norwick の司教区の収入から十七マルクスを教皇特使トネンゴのオットー Otto of Tonengo の尚書係 (Cancellarius) マギステル・グレゴリウスに支払ったという記録がある[3]．このグレゴリウスは，これより以前にノリッジの司教だった，ブランドヴィルのトマス Thomas de Blandeville から年金を得ていた．このトマスは教皇大使として一二二五年に英国に来て，一二二六年にノリッジの司教となり，一二三六年に没している．興味深いことに『物語り』の著者グレゴリウスはその序文に，同僚の要請もだし難く，つたない文章が諸子の研究の妨げとなることを懸念しつつもこれを書くとしるし，ここに同僚としてマルティン師およびトマス卿の名を挙げている．『物語り』の著者マギステル・グレゴリウスが一二三八年に十七マルクスの支払を受けた

教皇特使の尚書係であった可能性はかなり在るとみて良いと思われ，もしそうだとすると，『物語り』の著述はノリッジの司教トマスの没する一二三六年の少し前頃ということになるだろうか．そしてこれは，文中に教皇のパラッツォ（居館）が夏の間はローマにないことの指摘があり，教皇の夏の間のパラッツォがローマを離れていたのはインノケンティウス三世およびグレゴリウス九世（在位一二二七～一二四一年）の時代であって，その点でも見事に符合するのである．またもし別人であったとしても，こうした内容から推して，ほぼ十二世紀末から十三世紀前半という時代に書かれたものであると言えるだろう．十三世紀前半はヨーロッパの美術に古典美術からの影響が顕著になった時代（フランス・ゴティックの彫刻群，イタリアではアンテーラミの彫刻，それにフリードリッヒ二世の宮廷の美術も忘れるわけにはいかない）でもあり，美術史，趣味の歴史という観点からもこの『物語り』は貴重な証言である．

さてマギステル・グレゴリウスによる『ローマの驚異の物語り』の内容はどんなものか．この Narracio は日本語の語感からすると『物語り』と訳すよりも『報告』，『見聞記』と訳す方がむしろぴったりくる直接性，現場性にあふれた，ローマの古代遺跡の体験と調査の記録である．もちろん中世の著作の常として伝聞や他からの引用を体験の報告に混入することを躊躇することはないが，著者はローマで，大いなる好奇心をもって実際に古代の遺跡，建築や彫刻を見てまわり，驚き，感嘆して，その「驚き Mirabilia」を叙述する．彼が関心をもった古代彫刻について記述するその語り口は，古代美術に対する愛情と尊敬に満ちていて，親しい友人に楽しかった経験を語る，ちょっと得意げな，「驚き」を共有させようとする情熱と親密さとを感じさせさえする．しかし，この情熱が過ぎたせいだろうか，それとも「驚き」を語るには必ず踏襲しなければならないと，中世人らしく考えたせいか，彼はこの著作を事実の報告に止めず，これを誤って尊者ベーダの作と伝えられる作者不明の，あの有名な『世界の七つの不思議

De septem miraculis Mundi』と重ね合わせる．まるでローマには世界の七不思議がみんな揃っているんだよといばっているようなのである．確かにそれで，いかにも「驚異」らしくはなったが，そのためにこの著作の一部分に架空の，事実に基づかない叙述が混入することになり，それで，残念ながら Narracio はやはり『物語り』と訳しておくほうがよさそうだということになるのだが，序文をよく読むと，ローマにかつて在った，その記憶が今に伝えられる驚異についても報告するとなっているので，もしかしたらグレゴリウスは『世界の七不思議』は全部ローマの話だと本気で信じていたのかもしれない．

約四千五百語程からなるこの『物語り』の構成と叙述を，ここでやや具体的に紹介することにしよう．グレゴリウスはすでに言及した執筆の動機を語るプロローグに続く，三十三の章で，彼がみた「驚き」を叙述する．全体の構成は，先行する『驚異』を意識している面と『七不思議』と一致させようとする努力との結果だと言えるだろう．第一章はローマ市全体の景観，第二章は市門について述べ，第三～八章が古代のブロンズ像，九，十，十一章は『七不思議』に対応するもの，十二，十三章は古代の大理石像，十四～十五が palatium つまり邸宅だが，これにディオクレティアヌス帝のテルメも含まれる．十七，十八章は古代神殿，十九章は古代ローマの水道，二十章に現在カピトリーノ美術館にある六十体の皇帝の肖像（手元のガイド・ブックによると六十五体あるはずだが），二十一章パンテオン，二十二～二十六章が凱旋門と記念円柱，二十七から二十九章がピラミッドだが二十九章のユリウス・カエサルのピラミッドはサン・ピエトロ前のオベリスクのことである．三十章に再び『七不思議』のひとつアレキサンドリアの灯台がでてくる．三十一章がコロッセオ，三十二，三十三章は現在カピトリーノのパラッツォ・デイ・コンセルヴァトーリの美術館にある雌狼の像とおそらくヴェスピシアーノ帝のブロンズのタブレットとなっている．この『物語り』全体の構成から，マギステル・グレゴリウスがキ

リスト教関係の遺跡を全く取り上げていないということが理解される．グレゴリウスの関心は徹底的に古代の遺跡に向けられているのである．この点は重要である．もうひとつの『驚異』が，すでに述べたように多くのページを古代遺跡の紹介に割き，中世人が首都ローマに残る古代ローマのモニュメントをどのような目で見ていたかを知るうえの貴重な文献ではあっても，諸聖人の殉教の場所，コンスタンティヌス大帝の建設したバジリカ，トラステーヴェレ地区を初めとする諸聖堂について章を割き，キリスト教の聖地としてのローマという視点を忘れていない，むしろオクタヴィアーヌスとサン・ピェトロ・イン・ヴィンコリ聖堂との関係を示す伝説などを取り上げ，キリスト教ローマが古代ローマの正当な継承者であることを示そうとする意図のもとに書かれた感があることと明白な相違，対照を示すところである．しかし，今は全体的な意義の検討は後回しにして，マギステル・グレゴリウスの文章を吟味することにしよう．

第一章は「私は数え切れない塔や宮殿の建物が森のように広がる，この都市全体の素晴らしい景観を強く推奨したい」という言葉で始まる．そしてすぐルカーヌスが伝えるユリウス・カエサルのガリア出兵時にローマに献じた言葉を引用し，カエサルがローマを「至高の神々のイメージ」と呼んだことを思い出す．そしてこの見事な光景を前にすると，「筆舌に尽くし難く美しい，驚くべき人の業をここにお与えくださった神に感謝する．何物も，たとえ完全な姿であっても，この荒廃したローマにはかなわない」と述べ，この廃虚となったローマは地上の栄光が長くは続かないことを教えると述懐し，ほぼ同じ内容のラヴァルダンのイルデベールの詩を二行分引用する．第二章は一転して散文的にローマ市門を列挙する「市には十四の門があり，名前は……」．伝統的にローマ市の市門は十四とされてきたことをグレゴリウスは知っていたのだろう．確かに十四の名前を列挙しているのだが，なかに同一の門とことわって三通りの名を挙げているので，実際には十二しか言及しなかったことになる．いやに緻密であるよ

うでいて，どこか雑なところがある．おそらくグレゴリウスはもうひとつの『首都ローマの驚異について』を見たことがあって，少なくともその内容を聞いたことがあり，ここではその形を踏襲しているのだが，挙げられた門の名前は両者は完全には一致していない．

古代の彫像について語る時にグレゴリウスは最も多弁になり，そして最も独自性を発揮する．第三章でカステル・サンタンジェロのブロンズの雄牛に言及し（現存せず）エウローパをさらうジュピターが乗った牛だと言う説を紹介した後の第四章，第二のブロンズ像は「教皇の居館の前の広場にある，騎乗する人物を乗せた一頭の巨大な馬の像」，つまり現在，というより一五三八年にパウロ三世がラテラーノの広場から移し一九七九年の爆弾事件が起こるまでカンピドーリオ広場の中央に置かれていた『マルクス・アウレリウス帝騎馬像』である．「この希有な技量によって作られた記念像は，かつてはカピトリーノのジュピター神殿の前で，四本のブロンズの円柱の上に立っていた．しかし，尊敬すべき教皇グレゴリウスが馬と騎乗者を引きずり下ろし，四本の円柱をラテラーノのサン・ジョヴァンニ聖堂の中に置いた．馬と騎乗者はローマの市民たちが教皇居館の外に据えたのである」．グレゴリウスは同名の教皇・大グレゴリウス一世（在位五九〇～六〇四年）をローマ市内の多数の異教の記念物を破壊した責任者として，実はしつこく繰り返して非難しているのであるが（第六章，第十二章），その点に関してはまた後に言及する．マギステル・グレゴリウスは騎乗者が「民衆に答えるか，もしくは命令するように右手を挙げ，左手は……」と，細かく像の様子を説明している．彼はこの騎乗者が誰なのかという問題に大いに関心を持ち，おそらくいろいろと聞いて回ったに違いない．巡礼たちはテオドリックだと言い，ローマの市民たちはコンスタンティヌス帝と言うが[4]，枢機卿たちやローマ元老院の書記官たちはマルクスもしくはクイントゥス・クイリヌスであると言うと，諸説を紹介した後，学問のある者の言う事を信じようとマルクス説を取り上げて，次章をも充て

て詳しく説明する（マルクスではあっても，マルクス・アウレリウスではなく[5]，マルクスという名の兵士であり，次章でクイントゥス・クイリヌスの名で紹介されるのはリヴィウスが伝えるマルクス・クイリヌスの物語りであるらしい）．

第六章は続いてラテラーノの教皇居館前広場の大理石円柱上に据えられた，巨大なブロンズの頭部と片手であるが，これは実際にはネロのドームス・アウレアにあったと伝えられるネロ帝の肖像のブロンズ巨像の断片であるらしい．しかし，グレゴリウスはこの巨像が『七不思議』の一つ，ロードス島の巨像であると信じていたらしく，「この巨像はかつて，コロッセオに接したヘロディウスの島（insula Herodii）にあった」と書いている．コロッセオの近傍にはもとより，ローマには insula Herodii と呼ばれた土地はなく，おそらく insula Rhodes が変化して herodii となったのだろう．この巨像は一二六フィートあったと書いたものを見たことがあるとグレゴリウスは書いているが，それが『七不思議』のロードスの巨像の叙述であったに違いない．「ローマが繁栄していた時代には，この都を訪れた者はすべてこの像の前にぬかづき，ローマへの敬意を表したものだったが，しかし結局ローマ中の像という像は尊敬すべきグレゴリウスが破壊してしまった……」．巨大過ぎるために下から火をかけて溶かして壊したことを述べた後，「工人の優れた技量によって，堅いブロンズが柔らかな髪毛そっくりに見え……今にも動きだし，話しかけるように見える」と評している．グレゴリウスは頭と球を持つ右手と報告しているが，カピトリーノのパラッツオ・デイ・コンセルヴァトーリの美術館に現存するのは頭部と左手だそうだが，実は私は先日ローマに滞在していたにも拘らず確認を怠ったままである．ラテラーノの広場には，やはり石柱の上に，「滑稽な『プリアプス Priapus 男根像』と呼ばれる像がある」（第七章）．「非常に痛がっているように見える．体を前にかがめ，足に刺さったとげを抜こうとしているようである．ずっとそばに寄って，下から見上げると，その男根

が異常に大きいのがわかる」．これは像の描写から現在カピトリーノ美術館にある『スピナリオ Spinario 刺を抜く少年』と呼ばれる，中世末からルネサンスのヨーロッパ美術に多大な影響を与えた彫刻に対する最初の言及のひとつである[6]．ブロンズ彫刻の最後は『ローマ市民の守神 Sarvatio Civium』として知られる伝説上の群像である（第八章）．『世界の七不思議』の第一番にあげてあるのがこの群像で，ローマの属州の数だけあって，その属州が謀反を起こすと首に掛けてある鈴がなるのだが，グレゴリウスはこの伝説を説明した後，「これらの像はかつてローマにあったものである」と過去形で述べ，決して自分で見たとは言っていないし，これらの像が置かれていた建物も「その壁の大部分がまだ残っているが，天井などは荒れ果てていて近づけない」とのみで，どこにあるとは明言していない．第九章も空中に浮かぶベレロフォンの鉄製の像についての記述であるが，すべて過去形で記述し，見たとは言っていない．『七不思議』にあっても，ローマで彼が実際に見る事が出来なかった遺跡に関しては，慎重な言葉使いで伝聞である事を示唆しているのである．ところが，第十章はアポロ・ビアネウス Apollo Bianeus の浴場についてである．これが『七不思議』のティアナのアポロニウスの浴場に該当するらしいことは容易に推察がつくのだが，しかしこの場合に限って，グレゴリウスの叙述は余りにも真実味に溢れていて，事実なのか，フィクションなのかいささか判断に苦しむところがある．「これはまだローマに存在している．私は実際に自分で行ってみてそれに手を漬けてみた．しかし，硫黄の臭いがあまりにひどいので，もう料金を払った後だったけれども，風呂に入るのはお断りした」．これを読んで，グレゴリウスが実際にローマで硫黄泉に行ったことを疑うことができるだろうか？

第十二章で「さて，大理石の彫像に戻る事にしよう．もっともそのほとんどが，崇敬すべきグレゴリウスによって打ち倒され，破壊されてしまったのだが」と，『七不思議』との対応から離れ，「まず最初に，その例を見

ない美しさ故に」ヴィーナス像をとり上げ，オヴィディウスの『アルス・アマトリア』にあるパリスの審判の話に言及した後，その美しさを賛美する．このヴィーナス像は，後に続くクイリナーレの二頭の馬の像（『ディオスクーリ』のこと）から遠くないという記述から，一七五二年にベネディクトゥス十四世がカピトリーノの美術館に移した，いわゆる『カピトリーノのヴィーナス像』だと推定されている．だとすると，このグレゴリウスの叙述は，この像に対する中世における唯一の言及だということになる．「実に驚くべき，絶妙な技術によって白色大理石から造られたこのイメージは，彫刻というよりも命ある生き物のように見える．実際，雪のように白い肌に少し赤みがかった色彩の部分があって，その裸を恥じらっているようにも見える．この像の美しさと，おそらくなにか魔法のような魅力のために，私の宿から二スタディオンはある距離にも拘らず，私は知らないうちに三度もこの像を見に引返していた」．訳者オズボーンもおそらくこの文章はオヴィディウスの『ピグマリオン』の話を念頭に置いて書いたものという指摘をしているが，中世という文化環境では，すべてがグレゴリウスの「オリジナル」な表現であるということはありえない．『七不思議』では当然ながら，もう一つの『ローマの驚異』でも触れられていないヴィーナス像にグレゴリウスがこれだけの言葉をささげたということは，まさに喝采に値すると思うのである．

引用もあまりに長くなるのでこの辺で切り上げたい．概してグレゴリウスの建築に関する叙述は，彫刻に比べて生彩に乏しく，とり上げられた遺跡も現在特定できないものを多く含んでいる．第十六章の特定不能の『パラス神殿』の説明が，神殿そのものよりも中にあるパラス像に向けられ，「髪毛はなくなっているが美しい」とあるように，この『驚異の物語り』の特質，最大の美点は彫刻に関する著者の手放しの賛美にあるといってもいいのである．この十六章は最後にヒッポリトゥスとその家族がこのパラス女神像の前に引き出され，崇敬を拒んだために馬で引き裂かれて殉教した

話を紹介している．これがグレゴリウスがこの『物語り』で言及している唯一のキリスト教的な事績である．

さて，マギステル・グレゴリウスは，引用した部分だけでも三度にわたって教皇グレゴリウス一世を古代ローマの彫像の破壊者として非難したが，このグレゴリウス一世に対する評価は，訳者オズボーンによれば，十二世紀のイギリスの歴史家ソールズベリーのジョン John of Salisbury による評価（『教皇史 Historia Pontificalis』）と共通している[(7)]という．ソールズベリーのジョンはウィンチェスターの司教がローマで古代の彫像を集めて英国に持ち帰ったということを報告しているということだが，一一六二年にローマ元老院はトラヤヌス帝の円柱を破損してはならないという，罰則付きの条例を発布した[(8)]．これらのエピソードはすでに十二世紀中葉には，ヨーロッパにおいて（英国を含めて）古代ローマの美術遺品に対してこれを価値あるものと認め，収集し，所有しようという要求があったことを示しているだろう．もちろんそのような傾向は，古代ローマにおける元老院「S.P.Q.R.」の権威を再建し，カエサルのマントを相続するものとしてのローマ教皇庁が地上的な権威と支配権をも所有するという，インノケンティウス三世（一一三〇～一一四三年在位）の「政策」と無関係ではなかっただろう．この教皇は「カエサル」と尊称され，ハドリアヌス帝の斑岩製の石棺に埋葬されたと伝えられている．よく知られた十二世紀ルネサンスの一局面である[(9)]．このレポートの冒頭で言及した『首都ローマの驚異』の執筆の機縁は，おそらくこのインノケンティウス二世およびその後継者たちの「政策」と無縁ではなかったと考えられる．現存するその最古の写本は，十二世紀末および十三世紀前半とされる二点が，ともにヴァチカン図書館にあり，ベネディクトゥスという教会法学者の『ポリティクス』，ケンチウス・カメラリウス Cencius Camerarius という者が著した『ケンチウスの本』という，ともに半ばオフィシャルな著述と合本されており，このローマ案内記が古代ローマを相続したキリスト教

ローマという公式見解に基づく教皇庁監修，もしくはお墨付きの案内記であった可能性は高いのである[10]．一方，われらがマギステルの『物語り』はその序文から判断される限り，そのような政治，政策とは無縁な，故郷の同僚たちの要請によって著された個人的な見聞録である．グレゴリウスは政治的な観点とは無縁に，審美的，知的好奇心の対象として古代ローマを見，これを記述した．おそらく十三世紀前半の，イギリス（ノリッジの司教区の可能性は指摘した通り）の知識人たちが，政治的な思惑とは無縁に，古代ローマの美術に対する審美的，知的好奇心を強く抱いていて，グレゴリウスが鋭い観察眼と描写力をもってその好奇心に答えることができたという点に，知的風土と才能の存在の証拠であるという点に，この『物語り』の歴史的な意義があると思われる．

さて，このレポートは，中世の人々が古代ローマの遺跡をどのように見ていたのかという観点からマギステル・グレゴリウスの『物語り』に注目してその内容を要約してきた．そのなかで，偶像破壊者としての教皇グレゴリウス一世がしばしば言及されてきたので，最後にやや時代は下がるが，「偶像崇拝者」として非難された唯一の教皇，ボニファキウス八世（在位一二九四から一三〇三年）に言及して結びにしたいと思う．

ボニファキウス八世といえば，ダンテが地獄の谷底の穴に逆さまに埋め込まれたニコラウス三世に「おまえはもうそこに来たのか」と叫ばせて地獄行きの判決を下し，同罪のニコラウス三世に対して「おまえらと偶像崇拝の徒とどこがどう違うというのだ？」と難詰した（地獄篇第十九歌）ことが思い出されるが，ここでは『神曲』は関係がない．ヴァザーリによれば，ジョットをアッシージに呼んで聖フランチェスコ伝を描かせたのはボニファキウス八世ということになっているが，ヴァザーリのこの叙述は信用がおけないので[11]，絵画に関してのボニファキウスの擁護者・依頼者としての性格・実績は明確ではないが，彫刻に関して言えば，フィレンツェの彫刻家アルノルフォ・ディ・カンビオ Arnolfo di Cambio を重用

し，少なくとも現在，グロッタ・ヴァティカーナと呼ばれるサン・ピエトロ聖堂の地下にあるボニファキウス八世の墓碑，およびヴァティカン美術館にある大理石の肖像彫刻（厚浮彫）を制作させたことは明白である．そして，「偶像崇拝者」としての告発は，ボニファキウス八世が作らせた肖像彫刻に関して，ボニファキウスの天敵ともいうべきフランス王，フィリップ・ル・ベルの側からなされたボニファキウス弾劾の文書に含まれている[12]．告発はボニファキウスがアミアンの司教に命じて銀製の彼の肖像を作らせ，聖堂内に置き，崇敬するよう仕向けたこと，そればかりではなく，オルヴィエートそのほか多数の都市で，古代には偶像を置く習慣だった市門の上に大理石製の肖像彫刻を置かせたことなどを指摘しているが，これらの像の原型とも言うべき肖像が，上記のアルノルフォによる二点の作品である事は確実である．フィレンツェのオペラ・デル・ドゥオーモ美術館にある，かつてフィレンツェのドゥオーモのファサードに置かれていた，アルノルフォの工房の作とされるボニファキウス八世像も，これらの市門上に置かれたボニファキウスの肖像のイメージを与えてくれる作品といえるだろう．市門上に肖像を置くという事に関しては，フリードリッヒ二世がカプアの市門に冠を戴き玉座についた像を置かせた例がある．アルノルフォのシャルル・ダンジュー像（パラッツオ・デイ・コンセルヴァトーリ美術館）はこの古代文化の再興を目指したホーエンシュタウフェンの皇帝の肖像を継承するものであり，アルノルフォの肖像彫刻は単にゴティック的な形式感覚ばかりではなく，古代の皇帝像を意識させるものでもある．「告発」は「古代には偶像を置く習慣だった ubi antiquitas consueverunt idola esse」市門に肖像彫刻を置かせたとのみで，その形式に関しては沈黙しているが，その像の形式そのものが古代を思わせるものであったこと，従って偶像を思わせるものだったことも潜在的には含まれていると言えるだろう．ところで，アルノルフォ・ディ・カンビオという謎の多い芸術家，美術依頼者としてのボニファキウス八世に関しては，私は

現在研究中であり，そのうちに少しはまとまった文章を書く予定にしている．ここで私がフィリップ・ル・ベルによる「告発」に言及したのは，ボニファキウス八世が古代的な雰囲気を感じさせる肖像を作らせ，それを古代人のように市門に肖像を置かせたのも，それを「偶像崇拝」として告発することも，きわめて政治的な行為であったことを指摘したいと思ったからである．芸術作品の制作（依頼）および受容は，少なくとも中世においては，ほとんど常に政治的な色彩を帯びている．ヴァティカンに写本の伝わる『首都ローマの驚異』もまた，おそらくインノケンティウス二世以降の教皇庁の政治的プロパガンダの一つであり，中世における古代美術の受容もしくは利用，またはその尊重も，政治的な思惑から無縁ではないのである．しかしわれらがマギステル・グレゴリウスの『首都ローマの驚異の物語り』における古代彫刻の叙述は，やや衒学的にすぎる一面もあるとはいえ，このような政治的な思惑とは無関係に，彼がその魅力にとらえられ，率直にその美しさを賛美しているのである．その点がその文章の清々しさの源泉であると共に，これを中世における美術鑑賞の貴重な証拠文献とみなし得る理由である．

1990年10月　フィレンツェにて

末　吉　雄　二

注

（1）　私が参照したのは一九三〇年にローマで出版された，ラテン語・イタリア語対訳版 Mirabilia Urbis Romae, a cura di I. F. Corti, Fratelli Strini Ed., 1930. と英語版 The Marvels of Rome—Mirabilia Urbis Romae, Francis Morgan Nichols, Editor and Translator, 1st published 1899, Ellis and Elvy, London, 1889. 2nd Ed. with New Introduction, Gazetteer, and bibliography by Eleen Gardiner, Italica Press, New York, 1986. である．『驚異』の写本には二系列あり，より古い二点の写本はともにヴァティカンの図書館にある．合本された他の文書やその内容から，一点は十二世紀末，一点は十三世紀の写本と推定され，原典の執筆は十二世紀半ば，もしく

はその後半期とされている．もうひとつの系列はフィレンツェのラウレンツィアーナ図書館の『ローマ図鑑 Graphia aureae urbis Romae』と題された写本で，十四世紀前半のものである．両者は当然ながら細部においては一致しないが，英訳版は両者を折衷している．

(2) 英訳初版の訳者ニコルズは『ポリクロニコン』に挿入された Mirabilia は上述の『ローマの驚異』と同一の系統に属する写本と考えており，ヒグデンが根拠もなくその著者をグレゴリウスとしたとのべている．

(3) Josiah C. Russell, Dictionary of Writers of 13th Century England, London, 1936. オズボーンによれば Cancellarius という役職名は一般に使用されておらず，トネンゴのオットーによる臨時的な役名であろうということである．

(4) 『首都ローマの驚異』も一般にコンスタンティヌスの像と言われているが事実は違うとしている．しかしこちらでは誰という名前を挙げていない．

(5) マルクス・アウレリウス帝というアイデンティフィケィションはバルトロメーオ・サッキ・ダ・ピエデーナによる「シクストゥス四世伝」が初出であるという．

(6) 『スピナリオ』のヨーロッパ美術に対する影響については，J. Adhémar, "Influences antiques dans l'art du moyen-âge français", London, 1939. を参照のこと．

(7) Cf. T. Buddensieg, "Gregory the Great, the Destroyer of Pagan Idols. The History of a Medieval Legend Concerning the Decline of Ancient Art and Literature", Journal of the Warburg and Courtauld Institute, 28, 1965.

(8) 注 (7) に同じ．

(9) E. Kizzinger, "The Arts as Aspects of a Renaissance: Rome and Italy", in "Renaissance and Renewal in the 12th Century".

(10) Cf. L. Duchesne, "L'auteur des 'Mirabilia'", Mélange d'archeologique et d'histoir, 24, 1904., H. Bloch, "Der Autor der 'Graphia aureae urbis Roma'", Deutsches Archiv fur Erforschung des Mittelalters, 40, 1984.

(11) 末吉雄二，アッシージのサン・フランチェスコ聖堂上堂『聖フランチェスコ伝』におけるジョット——アッシージ・プロブレムに関する一私見——，慶應義塾大学日吉紀要H・3，昭和六十三年を参照のこと．

(12) この弾劾文書は P. Dupuy, "Histoire du differend d'entre le Pape Boniface 8eme et Philippe le Bel le Roy de France", Paris, 1655. が最

初の出版である。E. Müntz, "Études sur l'histoire de l'art a Rome pendent le moyen-âge. Boniface 8eme et Giotto", Mélanges d'archeologie et d'histoire, 1, 1881. に『偶像崇拝』に関わる部分のラテン語原文が引用されている。